

National Treasure
Pine Trees in the Snow
and the Four Seasons

国宝
雪松図と四季



2026 2027
12/12_{sat} — 1/30_{sat}

P R E S S R E L E A S E

三井記念美術館
Mitsui Memorial Museum

2026.9.11

国宝 雪松図と四季

年末年始の恒例となった、国宝の円山応挙「雪松図屏風」の公開。松に降り積もった雪を、塗り残した紙の白さで表す本作のように、東洋美術における四季・気象現象の表現には、一目では気付かない様々な技法や魅力が潜んでいます。本展では「雪松図屏風」を含む館蔵の書画・工芸品を中心に、移りゆく四季・気象を表す技法や、見立てに注目しながらご覧いただきます。

展覧会名 国宝 雪松図と四季

National Treasure *Pine Trees in the Snow* and the Four Seasons

会 期 令和8年（2026）12月12日（土）～令和9年（2027）1月30日（土）

開館時間 10：00～17：00（入館は16：30まで）

休 館 日 月曜日（但し1月4日、1月11日は開館）、年末年始12月28日（月）～1月3日（日）。

主 催 三井記念美術館

入 館 料 一般1,200（1,000）円／大学・高校生700（600）円／中学生以下無料

※ 70歳以上の方は1,000円（要証明）。

※ 20名様以上の団体の方は（ ）内割引料金となります。

※ リピーター割引：会期中、半券のご提示で、2回目以降は（ ）内割引料金となります。

※ 障害者手帳をご呈示いただいた方、およびその介護者1名は無料です（ミライロIDも可）。

会 場 三井記念美術館 / Mitsui Memorial Museum

[〒103-0022 東京都中央区日本橋室町2-1-1 三井本館7階]

東京メトロ銀座線「三越前」駅A7出口徒歩1分／東京メトロ半蔵門線「三越前」駅徒歩3分A7出口徒歩1分／

東京メトロ銀座線・東西線「日本橋」駅B9出口徒歩4分／

メトロリンク日本橋（無料巡回バス）乗降所「三井記念美術館」徒歩1分

読者からの

お問い合わせ先 050-5541-8600（ハローダイヤル）

ホームページ <https://www.mitsui-museum.jp>

*土曜講座、その他の展覧会関連イベントについては、当館ホームページをご覧ください。

*開催内容を変更する場合がありますので、最新の情報は、当館ホームページまたはハローダイヤルにてご確認ください。

また、展示室内の混雑を避けるため入場制限を行う場合があります。

報道関係の方からの
お問い合わせ先

三井記念美術館広報事務局 担当：大原、松井、富樫 TEL：03-6275-0243 / 090-6535-7754
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-41 神保町SF1ビル206 E-mail：mitsui@annex-inc.jp

展示構成と主な展示作品

*: 広報用画像貸出作品

展示室 1 ~ 3

茶道具にみる四季

うつわに四季の草花の図を施したり、あるいは焼き物の景色や形に、四季の風景や気象を見出し、銘によって象徴したりと、茶道具と「四季」のイメージは切っても切れない関係にあると言えます。本章では館蔵の茶碗や茶入を中心に、季節を感じさせる「銘」を持つ茶道具や、絵付けされた草花に注目しながら作品をご覧ください。かつての所蔵者が、茶道具の中にどのような風景や景物を見出したのかを想像しつつ、お楽しみください。



図1*

からものまるつばちやいれ あわゆき
唐物丸壺茶入 銘淡雪
南宋時代・12～13世紀



図2

せ と はしひめ で みずさし ありあけ
瀬戸橋姫手水指 銘有明
桃山時代・16～17世紀

明け方の少し明るい空に浮かぶ月は「有明の月」と呼ばれます。季節を通じてみられますが、和歌や俳句では秋の季語として用いられることが多いようです。箱蓋裏の「くればたまみるべき影と思えども なごりおかる有明の月」との和歌からの銘とみられ、半月のような釉景色をふまえたものでしょうか。歌は『題林愚抄』に後鳥羽院の作として載る一首です。



図3*

と と や
斗々屋茶碗 銘かすみ
朝鮮時代・16世紀



図4

さくら き じ ちゃぼこ
桜木地茶箱
江戸時代・18世紀

風合のある桜の木を用いて作られた茶箱です。蓋の内側には円山応挙の下絵による金時絵で、流水に浮かぶ桜の花びらが優雅にあしらわれています。表面は地味な茶箱ですが、蓋を開くと美しい桜の蒔絵が現れるという対比的な趣向が特徴です。



展示室 4

四季と気象を描く

春夏秋冬、それぞれの季節の訪れを告げるもの、その季節らしさを体感するものとして「気象」が挙げられます。それらは雪や雷のような有形のものであったり、あるいは春のぽかぽかとした陽気、まとわりつくような夏の湿気といった、目には見えないものであったりと様々です。本章では、画家や作品ごとの気象表現の違いや工夫、また「気象」そのものだけでなく、どのようなモチーフを加えることで季節感を表しているのかといった点に注目しながら、四季を描く絵画をご覧ください。

また、円山派の画風によって描かれた「四季海辺図屏風」4点を初めて展示いたします。6曲2双からなり、落款がなく筆者は不明ですが、円山応挙の子・応瑞^{おうずい}が御所の常御殿三之間^{つねのごてんさん の ま}に描いた「四季海辺図」と一部が似通い、円山派のレパートリーとして、こうした四季の水景を描いた作品が存在していたことを推察させます。瀟洒な作品ではありますが、四季の気象や空気・温度を感じながらご覧いただければ幸いです。



図5*

国宝

円山応挙 雪松図屏風

江戸時代・18世紀

大きな松の木に降り積もった雪は、白い絵具ではなく、紙の白い地色を塗り残すことで表されています。また左隻の松葉は、下の方ほど葉の密度を高く描いており、こんもりとした量感を感じさせる工夫がなされています。描かれた経緯などは明らかになっていませんが、画面に刷かれた金泥や、下部にみられる金砂子は、陽光を反射する雪景色を想起させるとともに、祝祭的な気分を演出しているかのようです。



図6

やまぐち そ けん

山口素綱 雪中松に鹿図屏風（右隻）

江戸時代・18～19世紀

応挙の弟子・山口素綱による作品ですが、技法面で雪松図屏風とは対照的な表現が目立つ一作です。南天に積もる雪は、白い絵具を塗り重ねて表されるほか、左隻の松の木も写実的というよりは丸みを帯び、意匠化の進んだ形で表されています。また雪松図屏風が金砂子を撒くのに対し、本作の画面下部には銀砂子が撒かれているようです。当初からのものかは不明ですが、光の反射で照り輝く雪の表現として、かつては今以上のきらめきを見せていたものと考えられます。



図7*

酒井抱一 秋草に兎図襖

江戸時代・19世紀

「野分」^{のわき}とも呼ばれる、台風のような強い風に大きく穂を揺らす秋草と、驚いて巣穴から飛び出てきたかのような兎が描かれます。風を表す線は一見すると筆の線のように思われますが、これらは板の木目によるものです。薄い板を斜めに貼り付け、その木目を強風に見立てるといふ、抱一の機知が発揮された作品といえます。



図8

川端玉章

「京都名所十二ヶ月」より
「六月 四条納涼」^{しじょうのうりよう}

明治31年(1898)

京都の景勝地や寺社を舞台に、旧暦一月から十二月までの風景を描く連作です。六月は「四条納涼」と題して、夜の四条周辺を描いています。墨のにじみ・ぼかしを存分に駆使してモチーフをぼんやりと描き、淡墨^{たんぼく}を主体に用いることで、辺り一帯を湿気が覆う、蒸し暑い夏の夜がしっとりと表現されています。

展示室 5

四季を詠む

古来、人々は四季の風景の美しさ、あるいは気候の心地よさ・苛烈^{かれつ}さに対峙した際、湧き上がった感興を文学として遺^{のこ}してきました。また、その詩歌を書に認^{したた}めたものは、手鑑^{て かがみ}や掛軸に仕立てられることで、後世の人々の心をも楽しませ続けています。本章では和歌色紙をはじめとする館蔵の書から、春夏秋冬を詠んだものを取り上げて展示いたします。

また当館としては約6年ぶりに、古筆^{こ ひつ}の中でも「三色紙^{さんしきし}」として尊ばれる「継色紙^{つぎしきし}」「寸松庵色紙^{すんしょうあんしきし}」「升色紙^{ますしきし}」の3点を同時に展示いたします。古典文学にゆかりの深い意匠による、蒔絵の調度品と併せてお楽しみください。

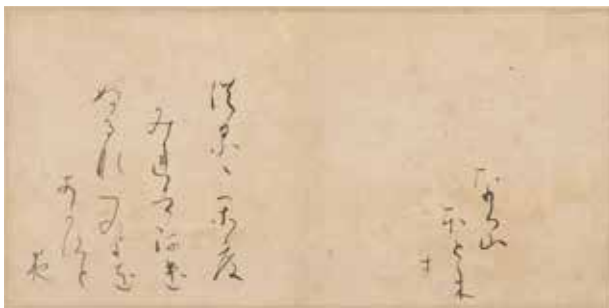


図9*

伝小野道風 継色紙

平安時代・10～11世紀

横長の画面の余白を意識しながら、流麗な筆運びによってしたためられた、散らし書きの書です。記された和歌は、『古今和歌集』にみえる壬生忠岑の一首「くるかと思れば明けぬる夏の夜を あかずとや鳴く山ほととぎす」で、夏の夜の短さを詠んでいます。



図10*

伝紀貫之 寸松庵色紙

平安時代・11世紀

『古今和歌集』の秋の歌に収録される、紀友則の「天の河あさせ白浪たどりつつ 渡り果てねば明けぞしにける」がしたためられます。2行目や5行目の「あ」の字にみられる三日月のような、縦方向に弧を描く曲線の細太が美しい作品です。「寸松庵」は、旧蔵者であった武将・茶人の佐久間将監ゆかりの、茶室の名前に拠っています。

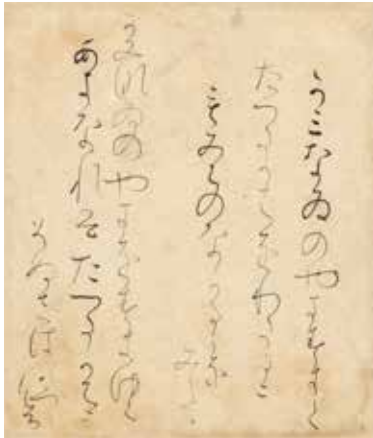


図 11 *

伝藤原行成 升色紙
ふじわらのゆきなり ますしき し

平安時代・11世紀

清少納言の曾祖父にあたる、清原深養父の私家集『深養父集』の最古の写本の断簡とされる書です。深養父の歌「かみななるの山を過ぎ行く秋なれば 龍田川にぞ幣はかずける」がしたためられます。

蜘蛛の糸のごとく細い線が、起筆やカーブする部分に絶妙な抑揚をつけながら、ゆったりと蛇行する川のように進んでいくのが見どころです。思わず指で筆致をなぞりたくなるような、連綿（線を続けて書くこと）の多さも目を引きま



図 12

舟月蒔絵二重手箱
ふねつきまきえ にじゅうてばこ

室町時代・16世紀

満月のもと、秋草の茂る川面に舟が浮かんでいます。蓋の表裏に「夜」「雲」「遅」「秋」「水」「来」の文字が、風景に溶け込むように表され（芦手絵）、『和漢朗詠集』の「秋の水漲り来って船の去ること速やかなり、夜の雲収まり 尽くして月の行くこと遅し」という漢詩を暗示しています。

展示室 6

四季と暮らし

本章では「四季と暮らし」と題し、明治の浮世絵師・水野年方による連作「三井好 都のにしき」の一部を展示いたします。同作は全13図からなり、当時の錦絵の流行主題でもあった、女性の季節ごとの家庭風俗が描かれています。「三井好」との作品名が表すように、三井呉服店の商品広告をも兼ねていたとされ、画中の女性の着用アイテムには当時の流行が取り入れられているとの指摘もあります。



図 13 *

水野年方

「三井好 都のにしき」より「朝の雪」

明治37年（1904）

降り積もった雪の中を、雪下駄を履いて出かける女性が描かれています。齒の高い下駄やショールからも身に染みるような寒さが想像されますが、遠景が画面右に行くにつれて、ぼかし・にじみが強くなるように摺られており、屋根の輪郭が曖昧になるほどの降雪を思わせます。

展示室 7

四季を束ねる

仮想空間たる絵画の中では、異なる季節の花々を同時に愛でることができれば…との望みも容易に叶えることができます。こうした装飾としての「四季の花づくし」的な作品がある一方、「四季の花が同時に咲く」様子を、この世の理から外れた「異界」の表現として用いる作品もみられます。

また、貴顕^{きけん}の屋敷や寺院の障壁画においては、しばしば四季を主題とした山水図や耕作図が描かれました。これは四季絵が、単に春夏秋冬の美しさを描きとめるという意味に留まらず、時として「循環する世界」そのものを表象したことに拠ります。移り行く季節を一つの空間に表すことで、その空間を掌握する支配者たることを疑似的に示す効果があったとの説もあり、「四季」をまとめて描く行為は、しばしば現代とは異なる文脈を与えられてきました。

本章では、こうした一つの画面ないし、一組の作品内に春夏秋冬をあしらった美術に着目します。先に触れたような、作品ごとの趣向の違いにも目を向けつつご鑑賞ください。



図 14 *

重要文化財 ^{じつげつしょうかくず} 日月松鶴図屏風

室町時代・16世紀

金地の背景に大きく松と水流を配し、川辺に降り立ち遊ぶ鶴を描いた屏風です。右隻の右半分にはタンポポやスマレ、ツツジなどの春草が、左半分にはヤブコウジや背の低いアシといった夏草が描かれ、左隻ではそのアシが徐々に色褪せながら穂をつける、秋の姿が表されています。また右隻には太陽、左隻には月をかたどった金属板がはめこまれており、春から秋、昼から夜という時の流れを一つの作品に収める点が見どころです。



図 15

かわばたぎょうしょう

川端玉章 草花図額

明治時代・19～20世紀（寄託品）

きらびやかな金地に四季の花々を大きく描いた、特大の花束のような作品です。春はヤマブキ、夏は牡丹やアジサイ、秋はナデシコやキキョウ、冬は梅、椿（ないし山茶花）など大小入り乱れて咲き誇る様子は、本作を飾る空間全体をも明るく華やかにしたことでしょう。



図 16

かのうながのぶ

狩野栄信 四季山水図

江戸時代・19世紀

大画面の四幅に、春夏秋冬の山水の景を描き分けた作品です。筆者の狩野栄信は、狩野派の副業であった絵画鑑定を通じ、和漢の古画を熱心に研究したことで知られます。名画の図像を再構成・リメイクする手法に秀でており、本作も「四季」を題材に、中国絵画の名品の図像をパッチワークのごとく巧みに組み合わせ、荘厳で格調高い画面に仕立てています。



図 17*

かめおか きれい

しゅてんどうじ

亀岡規礼 酒吞童子絵巻（部分）

江戸時代・19世紀

源頼光とその配下の武将たちによる鬼退治の説話を描いた絵巻で、サントリー美術館の所蔵する狩野元信の同主題作品がよく知られています。ただし、本作はサントリー美術館本にない「四方四季の庭」を描く点が特徴です。桜・藤・紅葉・冬枯れの庭と、四季の花鳥が同時に存在しており、鬼たちの暮らす空間が異界であることを強く印象付けています。（画像は春部分）

国宝 雪松図と四季

展覧会広報用画像について

展覧会の広報用貸出画像データ／読者プレゼント招待券をご希望される方は、下記ご確認の上お申し込みください。
当リリース記載の画像はすべてお貸出しが可能です。リストにない作品をご要望の場合は、お知らせください。

* 画像は展覧会の広報用としての使用に限らせていただきます。展覧会終了後の利用、また二次利用はお断りしております。

* 画像掲載にあたっては、【記載クレジット】を必ずご記載ください。

* Web サイトで掲載の場合は、必ず画像にコピーガードをかけてください。

* 読者プレゼントの際には作品画像を掲載し、展覧会会期中にご紹介ください。またお手数ですが、招待券プレゼントの受付・発送などは貴社、貴編集部にてお願いいたします。

* ご掲載紙・誌等は広報事務局までご送付ください。

〔貸出画像リスト〕 作品掲載にあたっては下記の情報をご明記ください

図 1	唐物丸壺茶入 銘淡雪	南宋時代・12～13世紀	三井記念美術館蔵
図 3	斗々屋茶碗 銘かすみ	朝鮮時代・16世紀	三井記念美術館蔵
図 5	国宝 円山応挙 雪松図屏風	江戸時代・18世紀	三井記念美術館蔵
図 7	酒井抱一 秋草に兎図襖	江戸時代・19世紀	三井記念美術館蔵
図 9	伝小野道風 継色紙	平安時代・10～11世紀	三井記念美術館蔵
図 10	伝紀貫之 寸松庵色紙	平安時代・11世紀	三井記念美術館蔵
図 11	伝藤原行成 升色紙	平安時代・11世紀	三井記念美術館蔵
図 13	水野年方 「三井好 都のにしき」より「朝の雪」	明治37年（1904）	三井記念美術館蔵
図 14	重要文化財 日月松鶴図屏風	室町時代・16世紀	三井記念美術館蔵
図 17	亀岡規礼 酒呑童子絵巻（部分）	江戸時代・19世紀	三井記念美術館蔵
読 者 招 待 券	5組10枚まで受付	※申し込み受付は 2026年12月11日まで	

お申し込み方法

当館ホームページ「プレスの方へ」ページの申込フォームに必要事項を入力し、お申し込みください。

入力いただいたアドレスに広報事務局よりメールをお送りします。



三井記念美術館ホームページ「プレスの方へ」ページ
<https://www.mitsui-museum.jp/press/press.html>

プレス関係の方からの
お 問 い 合 わ せ 先

三井記念美術館広報事務局 担当:大原、松井、富樫 TEL:03-6275-0243 / 090-6535-7754
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-41 神保町SF1ビル206 E-mail:mitsui@annex-inc.jp